

読み手はどこに : 京・江戸・博多、そして巴里 : 26

南野, 森
九州大学大学院法学研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/7344019>

出版情報 : 福音宣教. 78 (4), pp.10-11, 2024-04-01. オリエンス宗教研究所
バージョン :
権利関係 :



26 読み手はどこに

前回、「カトリック生活」誌の休刊について述べた。出版という営みは、書き手、作り手、届け手、読み手、といくつもの「手」によって支えられている。どの「手」が足りなくなっても、良い出版は持続できなくなる。

これまで私は、おもに憲法学や憲政評論の分野で書き手として出版に関わってきたが、その経験に比べると、本誌での連載については、出版に関わる「手」のうち「読み手」の姿がどうもよく見えない、という気がしていた。

論文や本を出したり、メディアで憲政について論評したりすると、SNS上に多様な反応が登場する。自分について他人がどう言っているかを検索することや「エゴサーチ」(ego search)などと言うが、憲法に関して私が何かを書くと、このエゴサーチに様々な意見がひっかるのである。なかには誹謗中傷のたぐいもあつて傷付いたり落ち込んだりすることもあるし、逆に嬉しくなったり勇気づけられたりすることもある。悲喜こもごも、である。

ところが、本誌での連載については、私のエゴサーチに全くと言ってよいほど反応がヒットしないのである。編集部の方々は「私たちの周りでは評判良いですよ」などと言ってくれるが、はたして本当だろうか。私が意気消沈しないように取り繕ってくださっているだけではないのか、などと思ってしまう。読み手は、いったいどこににいるのか。

今年2月、ヴィアートル学園洛星中・高等学校の東京同窓会があつた。卒業以来ほとんど参加したことがなかったが、昨年2月、我々の期が幹事を務める番に

「ヴィアートル学園洛星同窓会
2024東京の集い」(2024年2月
17日)

写真左は挨拶をする小田恵校長、
右は聖ヴィアートル修道会のウ
ィリアム・セルジュ・バティオ
ノ神父と筆者。

なり、少しでも協力しなくてはと久しぶりに参加し、翌年の再会を同期と約束したため、今年も参加したのである。といっても今年集まった同期は10人弱で、ホテルの大宴会場に集った数百人はほとんど見知らぬ顔ばかり。上座のテーブルには理事長や校長、元教員らが座っておられ、そのなかにヴィアートル会のウィリアム神父の姿があつたので、挨拶に伺うことにした。

写真も撮ってもらい戻ろうとすると、ふと、元教員のN先生が座っておられることに気が付いた。おそらく80歳は超えておられる。もう何十年も挨拶していないし、そもそも我々の期は教わる機会がなかった先生である。カトリック信徒であられたから時々ミサで一緒にすることはあつたが、所属教会も違ったし、まさか覚えておられないだろうと思ひながら、ひと言だけご挨拶をと声をかけたところ、先生は、開口一番、「ああ南野君、僕ね、君の連載を毎月読んでるんだよ」と穏やかに仰つたのである。思いがけない言葉に、私はひっくり返りそうになるほど驚いた。その後、もう一人、会場で偶然すれ違ったもう少し若い(それでももうすぐ古稀であられる)元教員のI先生に挨拶をすると、やはり連載を読んでいたとさつていた。「1回目からいきなり洛星のことが登場したね」と。読み手は、たしかにいた。SNSだけが世界ではない。

そして数日前。編集部からメールが届いた。締切を過ぎてしまったかと内心焦りながら読むと、編集部気付で私宛に北海道のとある修道院のシスターから手紙が届いたのだという。さて、この続きはまたの機会に……。



みなみの・しげる●九州大学法学部教授。京都市生まれ。洛星中・高等学校、東京大学卒業後、同大学大学院、パリ第10大学大学院を経て、2002年九州大学助教授、14年教授。AKB48の山内奈月との共著で好評を博した『憲法主義』(PHP文庫)ほか著書多数。